



Doshisha University Academic Repository

同志社大学学術リポジトリ

## 帝国のアンダーグラウンド

著者	車 承棋, 西村 直登
雑誌名	社会科学
巻	44
号	2
ページ	57-78
発行年	2014-08-29
権利	同志社大学人文科学研究所
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013670">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013670</a>

## 帝国のアンダーグラウンド\*

車 承 棋

翻訳 西 村 直 登

### 1 地下室と文芸誌，または檄文と芸術

…事件の首脳人物はロシア共産大学出身の金某という人物で，事件の中心地である窒素工場内に本部を置き，極めて巧妙な戦法を用いてきて，興南と咸興間にある本宮の朱某の庭園に地下室をつくり，秘密書類と書籍を保管しておき，その付近地帯には柱を立てておき，「サイレン」を設置して相互に連絡をとっており，地下室を出入りする時は覆面をし，いちいち暗号で行き来するほどであったといわれ，組織体制と戦術方法は取り調べが進むにつれて驚くほど拡大していくが，朝鮮で初めて見る重大事件であるといわれる<sup>1)</sup>。

1932年4月27日から数ヶ月にわたって行われた警察の大量検挙，捜査および取り調べで明らかになったこの重大事件は，いわゆる「第2次太平洋労組事件」あるいは「革命的労働組合組織運動事件」<sup>2)</sup>と呼ばれている。引用記事の金某は金元キムウォンムク黙であるが，彼はモスクワの東方労力者共産大学を出た後，プロフィンテルン傘下の太平洋労働組合のウラジオストク事務局幹部の資格で朝鮮に入り，朝鮮共産党再建運動に関わる一方，興南フンナムの朝鮮窒素肥料株式会社の工場地帯を中心に労働組合運動を展開している途中で検挙された<sup>3)</sup>。また，朱某は朱仁奎チュインギョ（1901～1956）<sup>4)</sup>で，彼は本宮にあった自宅の裏庭に地下室をつくり，印刷機を買い入れ，『労働者新聞』などを刊行しながら，革命的労働組合の組織運動に参加している途中で検挙された。国境を越え，ウラジオストクの太平洋労働組合秘書部の「10月書信」を秘密裏に搬入した当事者でもある彼は，羅雲奎ナウンギョの「アリラン」（1926）や「風雲児」（1926），沈熏シムフン製作の「朝ぼらけ」（1927）などに出演した映画

俳優であった。映画俳優であった彼がどのような契機で朝鮮窒素興南工場の労働者となり、工場のストライキを組織するなどの活動を展開しながら、革命的労働組合組織運動に身を投じるようになったのかは明らかではない。しかし、スクリーン上の彼と秘密の地下室の彼が同一人物でありながら、異なる位相にいたことは間違いない<sup>5)</sup>。検閲体制内部の厳しい目をかいくぐり、生き残ったイメージと非合法の暗い地下室、あるいは国境付近での身振りは同じではない。

一方、興南で朱仁奎が検挙された頃、『朝鮮日報』には李北鳴<sup>イフクミョン</sup>（1908～1988）の短編小説「窒素肥料工場」が連載されたが、2回で中止となった（1932.5.29～31）。折あしくも『朝鮮日報』の放漫な経営がもたらした著作権移動事件により、1932年6月1日から14日まで新聞が停刊されたが、続刊となって以後も李北鳴の小説が再び掲載されることはなかった<sup>6)</sup>。咸興<sup>ハムン</sup>高等普通学校に通っていた頃からゴリーキー、カップ（KAPF）、日本の左翼作家たちの文学を読み漁りながら、作家を志していた李北鳴は、1927年の卒業後、朝鮮窒素興南工場・硫安職場の労働者として働きながら、現場経験と工場を取り巻く現実を反映した作品を習作していたところ<sup>7)</sup>、咸興に来ていた韓雪野<sup>ハンソリョ</sup>に出会い、彼の文学指導を受け、カップとつながり、「窒素肥料工場」で『「朝鮮文壇」の末席』<sup>8)</sup>に入るようになったのである。カップ内でも非常に珍しかった労働者出身の作家として注目されながら、李北鳴はその後3～4年間、興南工場の経験が投影された一連の小説を多数発表した。

植民地朝鮮において連載中止となった「窒素肥料工場」は「初陣」というタイトルで日本語に翻訳され、「内地」のポスト・プロ文学雑誌である『文学評論』に島木健作の推薦を受けて紹介（1935.5）された<sup>9)</sup>。もちろん検閲を経たはずだが、この日本語の翻訳版が植民地期に公刊された〔作品の中で〕最も完成度の高い版本である。当初の原本を持っていなかった李北鳴自身も、1958年に北朝鮮において短編選集『窒素肥料工場』にこの短編を掲載する際に、『文学評論』の日本語の翻訳版を底本とした。朝鮮窒素興南工場の労働者の苦難と闘争を扱った小説が日本語に翻訳され「内地」に紹介されたのは、すでにナルプ（NALP）はもちろん、カップ（KAPF）も解体された頃であり、また興南の革命的労働組合組織運動事件に対する裁判が終了（1934年10月）し、その関係者たちがみな投獄された後だった。

全体的に見て、同じ時期に、ある俳優はアンダーグラウンド<sup>10)</sup>で革命的労働組合運動を展開しながら、治安維持法違反によって拘束され、ある労働者は検閲体制のなかで朝鮮を代表する労働者出身の作家として浮上した。現段階において大雑把に言うのであれ

ば、ある俳優はフィクション (fiction)の世界から実在の世界へ、ある労働者はその反対の方向に移行したように見える。しかし、まだ実在の世界もフィクションの世界も二人にとって同一のものであったと決めつけることはできない。また、この移行が必ずしも一方向的・不可逆的なものであるともいえないだろう。しかし、二人にそれぞれどのような「転換」が存在し、転換の前後の世界が互いに位相の違いを持っていることは間違いないだろう。意味深長なことは、これらの転換点に朝鮮窒素興南工場が存在しているということである。

本稿の目的は、野口財閥の巨大な化学コンツェルンがつくり出されていた植民地朝鮮の興南と、そこに媒介される「転換」の系列をヒントに、植民地主義の実定性 (positivity) の構造をもう一度考えてみることにある。本稿において、興南は1930年代以降、植民地政策の変化と日本の新興財閥の形成、さらには「経済新体制」が成立する植民地／帝国体制の一連の転換過程を集約的に表現する場所であるだけでなく、植民地主義的統治の構造と性格をあらわにする象徴的な場所として取り上げる。

## 2 興南というグラウンド・ゼロ

すでに鹿児島・大口に水力発電所を、水俣と延岡に工場を所有していた野口<sup>したがう</sup>遵 (1873～1944) の日本窒素肥料株式会社は朝鮮に進出し、世界有数の規模の大型水力発電所と巨大化学コンツェルンを構築した。野口は朝鮮水電株式会社と朝鮮窒素肥料株式会社を設立 (1926) し、朝鮮総督府の全面的なバックアップの下、鴨緑江上流に当たる赴戦江、<sup>アムノクカン</sup>鴨緑江、<sup>ブジョンガン</sup>長津江、<sup>チャンジンガン</sup>虚川江に相次いで水力発電所を建設して豊富な電力を確保しながら、興南<sup>ホチョンガン</sup><sup>11)</sup>に大規模な工場地帯を構築した。興南は単なる企業都市ではなく、資本が行政、警察、教育などの規律・統制権力と一体化された「資本－国家コンビナート<sup>12)</sup>」と呼びうる場所であった。意味深長にも、邑に昇格した興南の初代邑長は野口自身であった。

野口コンツェルンは、電気や肥料はもちろん、鉄鋼、燃料、火薬から一般消費財に至るまで多様なレベルの商品を生産しただけでなく、学校、道路、鉄道、港湾などの都市基盤施設まで含めて、実に「集合的消費財」<sup>13)</sup>を生産した。特に、肥料や火薬をとものに生産したというのは象徴的である。アンモニアが肥料にはもちろん、火薬の原料にもなったが、農業生産性を飛躍的に高めた窒素肥料と人命殺傷用の火薬を同時に生産しながら、野口の「資本－国家コンビナート」は、人間の生と死に深く介入していたのである<sup>14)</sup>。肯定的にも否定的にも公共的な性格を有する物質をつくり出しながら、生と死を捕獲する

野口の「資本－国家コンビナート」は、興南という場所を、人間と自然、帝国と植民地、資本と労働が葛藤の中で相対する、一種の最前線をつくりあげた。

帝国資本と総督府権力が結託して土着民を暴力的に追放し、その「空いた」空間に新しい計画都市をつくりあげる過程<sup>15)</sup>は、植民地の本源的蓄積が発生する時点に主権的権力の素顔が現れる場面に似ている。そのような点において、興南は植民地の発生史を反復している場所でもある。また、自然的な流れを正反対方向に向けて電力を得て、自然的要素を分解し合成して、肥料からジェット燃料まで抽出する先端技術は、自然支配の領域を拡大していく流動的な前線を形成した。そして何よりも、資本と労働間の一般的な対立だけでなく、民族的な差異が階級的な差異と重複する複雑な対立関係は、興南を「労働者の都市」に変貌させた。「労働者の都市」とは、単に工場の規模に比例して、日本人、朝鮮人、中国人から成る多数の労働者が集結する都市であることを意味するのみではない。技術職労働者のほとんどを占めていた日本人労働者は、概して九州地方、特に水俣工場から転勤させるやり方で調達したが、朝鮮人労働者の場合にはそれぞれの組を通じて募集・管理したり、試験による公募または一時的な日雇い採用の形式をとることによって、工場の近くに多数の産業予備軍がつくられるようになった<sup>16)</sup>。この人口には、産業合理化あるいはその他の理由で解雇された労働者たちが含まれている。そうして、工場周辺には常に雇用労働者人口をはるかに超える、そして一時的な雇用を待つ自由労働者と潜在的な労働者たちが徘徊していた。

このように「資本－国家コンビナート」が、自然、植民地、労働と対峙する最前線であったため、興南工場は同時に要塞でもあった。ファクトリー (Factory) という単語がヨーロッパの植民地主義企画<sup>プロジェクト</sup>の発明品でもあったように<sup>17)</sup>、興南の工場＝要塞は自然、植民地、労働に対する開発と搾取の最前線にあった。特に、日中戦争勃発以降、徐々に兵営と変わらない〔機能を果たす〕場所となっていたことは言うまでもない。

この工場＝要塞という場所が守らなければならないのは他でもなく、生産的労働に満たされた時間であった。工場の機械は三交替で入れ替わる労働力によって24時間稼働され、労働は生産の時間に休止が生じないようにする組長と幹部の監視、命令、暴力による、非常に厳しい規律の下で行われた。二重の鉄条網で囲まれた工場の警備室は、前線の哨所のようなものものしい警戒の下、労働者の出入りと工場物品の搬出を厳しく統制した<sup>18)</sup>。そして、日本語で作業指示が行われるこの空間の中で新しい物質と生産工程を開発するための実験が存分に行われていた<sup>19)</sup>。工場＝要塞はそれ自体、植民地の縮図であったといっても過言ではないだろう。

自然、植民地、労働と「資本-国家コンビナート」が出会うこの最前線をグラウンド・ゼロ (ground zero) と呼ぼう。グラウンド・ゼロとは、核爆弾または大量破壊兵器が爆発する地点、したがって災害発生の原点でもあるが、ある急激な変化の中心、あるいは支点を意味することもある。もちろん、文字通りの基準点であるともいえる。興南の工場=要塞をグラウンド・ゼロとして設定するということは何を意味するのか。帝国の資本と国家権力が一体化し、高度の開発と搾取を行う場所、都市を形成し公共の性格を有する物質をつくり出しながら、人々の生と死を捕獲していく場所、究極的に自然と人間を生産のリズムの中に溶解させながら、特定の生の秩序を構築する場所。近代的植民地プロジェクト  
企画そのものを象徴するこの場所をグラウンド・ゼロとして指定することにより、日本の植民地主義の実定性の構造を把握することができるのではないだろうか。それは、グラウンド・ゼロとしての興南が、前述した朱仁奎と李北鳴の「転換」および彼らが移行していった場所の位相の違いを理解するための基準点となることを意味する<sup>20)</sup>。

グラウンド・ゼロは生と死が交差する根源的環境を意味するが、当然のことながら、それがある自然状態を指し示すことでは決してない。むしろ、常に-すでに、法と言語と制度によって規定された秩序でありながら、または法と言語と制度を支える基盤であるといえれば正しいだろう。したがって、工場=要塞は強迫的にその内部を「一秒の無駄もない」<sup>21)</sup> 生産的労働の時間で隙間なく埋めようとするが、そこで生かしても、殺してもするパルマコン (pharmakon) 的な物質がつくられるように、その空間は、予期せぬ「休止」をも内包している。工場=要塞の労働の時間を邪魔する諸要素は、予期せず現れ、統治不可能性を予感させる。

第一に、労働規律の失敗である。朝鮮人労働者のほとんどは、先端の化学工法はもちろん、危険物を取り扱う基礎知識も持ち合わせていなかっただけでなく、近代的な工場労働の規律が身体に浸透していないことが多かった<sup>22)</sup>。これは、朝鮮人労働者に対する日本人労働者の「軽蔑」とともに野口自身が朝鮮人労働者を牛や馬のように考えて使えと言ったという伝言<sup>23)</sup>と一緒に、労務管理という名目で日常的な暴力を駆使する根拠として働きもした。もちろん、朝鮮人労働者に現れる労働規律の不在は、労働の熟練自体を不可能にする植民地的な労働流動性の条件と切り離すことができない現象でありながら、その上、労働に対する植民地主義的な階層構造を維持しながら、労働力の価値を過小評価するための装置でもあった。しかし、この規律化されない身体は、事故による工場設備の破壊や損失を招き得る要因であった。そのような点において、身体に加えられた暴力は統治不可能なことに対する焦燥感を含んでいる。植民地の労働力に対する平価



切り下げが逆説的に統治不可能なものを温存させる結果をもたらしている。

第二に、事故と疾病が挙げられるだろう。事故は単に、労働規律の不在によってのみ発生するものではない。「死の工場」、「疾病の都市」と呼ばれたりした興南と工場=要塞は、その中に強迫的に生産的労働を埋め込もうとすればするほど、労働する身体を内外で破壊する結果をもたらしたりした。様々な爆発事故<sup>24)</sup>のみならず、工場から出される有害物質が労働者と工場=要塞付近の住民の身体を脅していた。興南一帯ではしばしば、原因不明の疾病が横行していたのである<sup>25)</sup>。アンモニアや硫酸などの有害ガスが発生する作業環境によって、肺疾患を患う労働者たちが続出しながら、何の規制もなく新たな技術を適用し、特別な制裁なしに廃棄物を無断で放出することによって、予測できない疾病を引き起こした。技術開発、効率性、無限の生産は常に死の脅威と共存していた。工場=要塞は死の痕跡、または事故や疾病によって生産能力が失われたり、低下した労働力を外に追放することにより、内部の生産の時間を守ろうとした。しかし、工場=要塞のフェンスは、事故はもちろん、追放された（捨てられた）廃棄物が形を変えて、超えて入って来ることまでは防ぐことはできない。

第三に、ストライキ、サボタージュ、アジテーションなどがある。生産効率性のみを考慮した労働力の搾取と植民地主義的な差別は当然ながら反発を招くしかなく、工場=要塞から最も徹底的に排除されなければならないのは、他ならぬ抵抗可能性であった。警備が工場=要塞の境界を守り、組長と監督者たちが内部の時間-空間を統制する行為自体が、労働する身体がまともに「労働力」としてのみ構成される存在ではないという事実を反証している。警備は工場=要塞の周辺を取り囲んでいる流動的な人口と内部がある不穏な内通を凶ろうとしているのかを警戒しなければならず、現場の監督者たちは、いかなる逸脱、いかなる怪しい視線、いかなる非正常な身振りが生産の流れを切断させるのかを監視しなければならなかった。工場=要塞への許可なき入場は徹底的に禁止されていたが、警戒の視線は、そのフェンス越しに目いっぱい延びていった。警察との緊密な協力によって拡張された監視の眼は、労働者の「夜」を照らし、親睦会、読書会などを探り当てた。しかし、これらの監視と統制にもかかわらず、工場=要塞の内外で発生する抵抗と「休止」の契機を完全に除去することはできなかった。少なくとも、日中戦争勃発前までは毎年、組織運動事件が絶えず起こった<sup>26)</sup>。

このように、生産的労働を妨害する諸要素が工場=要塞の安全（security）を内外から脅かしていたという点からも、興南の工場=要塞は、統治と統治不可能性が対峙する最前線であり、その場所がグラウンド・ゼロであるということも、そのような意味におい

てである。高度の生産と危険な破壊が共存する場、生かすことと殺すことが共存する場、統治と統治不可能性が共存する場としての興南は、朝鮮に構築された植民地主義的な構造を持つグラウンド・ゼロである。

### 3 グラウンド・ゼロをめぐる身体性の転換

興南というグラウンド・ゼロを基準点に据えて、朱仁奎と李北鳴の「転換」を再考すると、先にフィクションと実在に区分した領域の性格を修正せざるを得ない。朱仁奎が映画俳優から革命的労働組合運動の組織員に、李北鳴が労働者から作家に「転換」していった地点にグラウンド・ゼロとしての興南があるならば、その「転換」は、グラウンド・ゼロを起点にどのような還元不可能な秩序が交差しているのかという問題を提起する。この還元不可能な秩序は、単純に生産と破壊、生と死、統治と統治不可能性として対比させることができず、むしろこれらすべての特異な結合とは異なる効果であるとみなすべきであろう。要するに、地下運動や芸術活動のうちのいずれか一方が、すぐに死や生を意味するということはないからである。

まず、朱仁奎の場合をみてみよう。朱仁奎は映画俳優でありながら、地下運動を展開した。彼が出演したり、製作（しようと）した映画は貧困と階級対立などの社会問題を扱ったりもしたが、それらの映画を彼の地下活動と直接結びつけることはできない。理念的志向において、同一の性格を有する実践さえも、内容と表現の間には一政治的な検閲の問題にも縮小できない一様態的な自律性が存在すると同時に、表現のレベルにおいてもその実体と型式の間は区別されなければならない<sup>27)</sup>。のみならず、例えば、朱仁奎に劣らず、芸術的な才能を持っていた弟の朱善奎が「私たちは今、音楽を勉強することよりもっと重要なことをしなければならぬから」<sup>28)</sup>と述べる状況が重要である。どちらか一方を選択するために別の一方を切断しなければならない状況、たとえ社会的な苦痛と怒りと希望を伝えるために映画というメディアが利用されたとしても、映画が製作・流通する場所とは全く異なる場所に入らざるを得なかった状況を考慮しなければならないだろう。

朱仁奎においては、フィクションから実在への転換というよりむしろ、メディアを通じて「顕示される形象」から「メディア (medium) 自体」への身体性の転換が示されている。脚光を浴びる「悪役」俳優として名前と顔を売り、映画館のスクリーンに映し出された身体と身振りは、工場＝要塞と内通している狭く暗い地下室へ、そして再び植民



地／帝国の「外部」につながる秘密のルートへと入り、また別の関係を築くための連結ツールとなる。もちろん、俳優というそれ自体にいかなる理念、価値、感情を伝達するメディアとしての性格を有している。しかし、スクリーン上において、そのメディア的な性格は、特定の正体性を持つ「人物」の形として結晶化される。それに反して、地下と外部に至るツールとしてのメディアは、そのネットワークの関係の中で溶解されていくのである。イメージと身振りで現れる身体、配役という仮面をかぶることによって、むしろ、鮮明になる固有の身体は変装と仮名の裏に隠れることによって分散され、他の身体と結びつく。朱仁奎は高基洙<sup>コギス</sup>、朱光海<sup>チュウガンヘ</sup>などの仮名を使用して活動したが<sup>29)</sup>、地下組織運動において仮名は、単に固有の正体を隠蔽するためのツールであるばかりでなく、それぞれの仮名を通じて結びつく異なる多数の諸関係のルートを表す名前でもある。これらの互いに異なる名前は興南工場の労働者たちを連結し、ストライキを起こし、ウラジオストックからプロフィンテルンの文書を秘密裏に運び込む伝達者になることもある。この「地下」活動は、グラウンド・ゼロとして興南が不安定に統合している生／死、生産／破壊、統治／統治不可能性の流動性をさらに不安定で決定不可能な状態にして、その中で植民地／帝国の境界を横断する新しいつながりを創案し出すことであった。

しかし、植民地／帝国体制のアンダーグラウンドで行われるこのメディアとしての身体の媒介活動は、グラウンド・ゼロの上に構築された法、言語、メディアと出会った時に停止し、孤立し、固定される<sup>30)</sup>。多数の名前を「朱仁奎」という同一性に還元して命名し、死体を解剖して説明するがごとく、あのメディアとしての活動を「国体変革の陰謀」として固着させ、その身体をそれがメディアとして結びついていた関係から切断し隔離させたのは、植民地の警察と司法権力であった。植民地／帝国の主権的権力は、このアンダーグラウンドにおける活動、すなわち、植民地／帝国の法、言語、メディアを無視したり、攪乱したりする不穏な動きを再び法、言語、メディアによって捕獲し配置することによって、安全性を回復しようとするものであるかのように見える。しかし、この地下運動を阻止し、その活動家を検挙するために、実際には数多くの秘密警察、特高、情報員たちもまた同様の動きをしてアンダーグラウンドで彼らの後を追っていき、その道ごとに脅迫と拷問と殺害が行われていた。要するに、この「アンダーグラウンド」とは、植民地／帝国のグラウンド・ゼロが不安を抱えながら隠蔽している暴力の起源、グラウンド・ゼロ周辺を幾重にも包みこみ、その中を見えなくさせるようにつくられている近代化、文明化、合理化などの虚構の秩序がどのような主権的暴力によって生成・維持されているのかを暴く領域でもある<sup>31)</sup>。

そうであるならば、この地下運動の身体、「非合法」の領域において自らメディアになり、新しいつながりと結合を求める身体は、どのような主体性を構成しているのだろうか。彼らが植民地／帝国の法、言語、メディアを無視したり違反しながら新たに形成する主体性は何なのか。もちろん、彼らが法、言語、メディア以前の存在ではないという点において、その上、いつでも法、言語、メディアにより「違反」行為として捕獲される存在であるという点において、法、言語、メディアの外側に常に－すでに宙づりになっているといえる。さらに、コミンテルンとプロフィンテルンという現実社会主義の国際主義運動路線の指導を受けていたという点において、また別の法、言語、メディアに捕獲されていたともいえる。しかし、太平洋労働組合秘書部が「太平洋沿岸の国々の労働運動方針を具体的に実践しようとする組織であった点から、コミンテルンとは異なっていた」といえるし<sup>32)</sup>、さらにまた、この組織運動が共産党再建運動とつながっていたとしても、「党を再建するための人的力量を労働階級から探し〔出して〕結集し訓練する方法として、以前の再建方式とは正反対であった」と評価<sup>33)</sup>することができるのであれば、少なくとも実行中の活動の中で労働者たちの立ち位置から新しい法、言語、メディアの潜在性が浮かびえたのではないだろうか<sup>34)</sup>。この潜在性は実現されず、数回にわたる赤色労組再建運動も失敗に終わったが、その運動の成否にかかわらず、そして、その運動への参加とは直接関係なく、植民地／帝国のアンダーグラウンドであったために、生まれては消えていく脱境界の主体性はないのだろうか。

一方、朱仁奎とは異なり、李北鳴の場合は興南の工場＝要塞を経て、植民地朝鮮を代表する労働者出身の作家となった。彼はあのグラウンド・ゼロの地点から法、言語、メディアの制度化された領域に入っていったように見える。何よりも彼の執筆は新聞紙法、出版法、治安維持法などが効力を発揮している細かい検閲体制の中で行われ、書けるもの／書かれたものと読めるものは、この体制の中で決定された。この中で李北鳴は「李北鳴」という固有名で活動した。もちろん、彼にも李淳翼<sup>イヌニク</sup>という「本名」がある。しかし、仮名と筆名は別物である。仮名が数多くの「違反」のルートを連結する名前として、それが一つの同一の名前に還元される事態すなわちそのルートの消滅と活動の終了を意味するものであるとすれば、筆名は執筆主体の自律性という仮象に関連している。当然、筆名の本名が明らかになるからといって、執筆自体が脅かされることはない。つまり、李北鳴は文化的で言語的な自己構成の場で活動していたのである。

また、朱仁奎が興南の工場＝要塞のフェンスを〔突き破って〕「浸透」し、その内外をアンダーグラウンドにおいて「連結」しようとしたこととは異なり、李北鳴は言語を通

じて、工場＝要塞の生を「暴く」。朱仁奎が工場＝要塞をめぐって、自らメディアとして活動したのとは異なり、李北鳴はメディアに工場＝要塞を掲載する。つまり、李北鳴は一実在からフィクションに転換したというよりは—工場＝要塞の「生産力の構成要素」からその生産力の「代理＝代表者 (representative)」への身体性の転換を示しているといえる。彼を「代理＝代表者」たらしめる場所は、文学という言語的、制度的な場であり、この場は、特定の規則や規範を共有することによって維持され得る植民地／帝国体制内部の秩序の一つである。この秩序がグラウンド・ゼロによって支えられていることは言うまでもない。言い換えれば、李北鳴はグラウンド・ゼロによって支えられている秩序の中で、グラウンド・ゼロの現場を文学の言語によって伝達するという困難な状況の中を突き進んでいった。それは、すでに設定されている制度的な規則とすでに決定されている諸関係がつくりだしたルートをこじ開けて声を残す取り組みであった。

さらに、彼が文壇に登場した時期、朝鮮プロレタリア文学の全般的な状況もそれほど友好的なものではなかった。ほとんどが小ブルジョア出身であったカップの作家たちにとって、労働者出身作家の登場は望ましいものであったが、彼の文学は、期待したほど大きく注目を浴びたり、高く評価されたりすることはなかった。彼の作品は、「主題の積極性の低下と性格の単純化」<sup>35)</sup>という問題を抱えていると、評価されたりもした。また、彼は興南の工場＝要塞での生を形象化する試みを続けている時、カップでは、ソ連の作家会議で提起された社会主義リアリズムの方法を導入するかどうかをめぐって盛んに論争が行われており、論争の最中に、社会主義リアリズムが標榜する「客観的な真実を描け」というスローガンに寄りかかって、「転向者たち」が出現するほどにまだっていた。ここに1934年、いわゆる新建設社事件によってカップ文学者たちの検挙が行われ、カップの組織自体も1935年に解散してしまった。李北鳴の作家としての才能や力量と全く無関係ではないだろうが、「労働者出身作家」としての彼は、いわば少し遅れて到着した<sup>36)</sup>。

ある意味では、「代理＝代表者」になることによって、彼は遅れて到着する運命にさらされたといえるだろう。「労働者出身作家」として、彼は一種の後日談を書いていたのである<sup>37)</sup>。代理＝代表者となることで、工場＝要塞内外の生を叙事化 (narration) することができたが、その物語は現場と分離し、「典型的な状況の典型的な性格」を要求するプロレタリア文学の審美的規範と制度の下で流通されなければならなかった。李北鳴は「窒素肥料工場〔初陣〕と「女工」(1933)などにおいて資本の非人間的な境遇に対抗する労働者の自発的な団結と闘争を提示したが、その他の多くの小説では、労働者の死と破壊された身体を通じて、戦場のような工場＝要塞の現場を明らかにしようとした。例えば、

「窒素肥料工場」の主人公文吉が工場生活を始めて4年後に肺結核になったように、「出勤停止」のチャンスも3年後に肺結核になる。「アンモニアタンク」(1932.9)のトンジェはタンクの清掃作業中に窒息し、「基礎工事場」(1932.11)のポンウォンはクレーンのハンドルが胸にぶつかり、「出勤停止」のチャンス、ウンホ、ソンサムはアンモニアタンクの爆発によって跡形もなく解体されてしまう。このような形象は、社会主義的な「典型」に当てはまらないと評価されたであろうが、それよりも彼ら死の再現がどのような効力を持っていたのかということが明らかではない。彼らの死が工場＝要塞の生産の時間を切断し、破壊的な休止を生み出すには、再現の時間は常に遅れて来るからである。

このような「遅滞 (time lag)」の問題は、「窒素肥料工場」がたった2度の連載で中断となり、3年が経って「内地」のポスト・プロ文学雑誌に日本語で全載されるという特異な現象とともに、ますます意味深長な局面をあらわにする。「初陣」は、中国の作家雷石楡(1911～1996)をはじめ、社会主義的な性向を持つ日本の新人作家たちの短編とともに、1935年5月『文学評論』臨時増刊「新人推薦号」に掲載された。

私は「初陣」を読んである種の感動を受けたが、正直なところ、それは作品が芸術品として高いものであるところから来るものではなかった。私はむしろ作品として古臭い一時期前のものであるやうな感じを受けた。「初陣」の素材は素晴らしい。……作家が、朝鮮の作家であること、朝鮮プロレタリアートの生産場面における生活が生々しくとりあげられてあるといふことに私はこの作品の価値を認めるのである。これはハンデイキヤブなどではない。作品として幼稚であるといふことはこの際だしたことはない<sup>38)</sup>。

推薦者である島木健作がこの作品を選んだ理由は、いたって明瞭である。それは他でもなく「素材」の卓越さである。作品としては古いもの、あるいは幼稚なもの、すなわち、すでに過ぎ去ったか、まだ来ないものであり、「今日」と出会えていない。もちろん島木健作にとって、「今日」とは『争議を書くこと自体を古臭いかの如く考へる、考へ方が行はれてゐる』<sup>39)</sup>時代、つまり、過去のプロ文学の公式主義的な図式に対する反発で、むしろ争議を生活と分離されたものと考えた時代である。したがって、李北鳴の小説を通して、同時代の「内地」の左派的傾向の作家たちが忘却しているプロレタリア文学の「出发点」を想起させようとしたのかもしれない。しかし、そうであるからこそ、むしろ李北鳴とその小説は「今日」からさらに遠い場所に追いやられる。

李北鳴の小説に対する島木健作の態度は、ちょうどこの時期の「内地」のプロレタリア文学の退潮と相まって、プロレタリア文学のサブジャンルとして「植民地文学」が台頭するコンテクストの典型を示している<sup>40)</sup>。植民地／帝国体制のメディア環境および出版市場の変化が植民地出身の作家たちに日本語作品を新たに商品化する必要性を気づかせ、このような作品の存在が帝国内の民族的な位階関係と二重言語の葛藤状況を非可視化させる効果を産み出した<sup>41)</sup>。しかし、特に島木健作のように、植民地のプロレタリア文学を、無力化する「内地」のプロレタリア文学を活発化させるために「高貴な野蛮」として召喚とする態度が意味深長である。上の引用文にもはっきりと表れているように、「高貴な野蛮」は叙事（芸術的な構成）ではなく、描写（素材）の側面において表れ得るものなのである。この描写的な側面は、「朝鮮の」作家が書いたというその地域的性格とともに、日本プロレタリア文学の現在を批判するための「周辺」の参照点として導入され、日本のプロレタリア文学の刷新という叙事の一部分を構成する。

グラウンド・ゼロの現場性は、「代理＝代表者」で再現されることによって、植民地／帝国規模で実定化されていく文学制度の網の中に、常に一すでに遅れた場<sup>42)</sup>を占めるようになる。この場に封印された声が再び発話できるようにするためには、この実定性の森をわけ入り、グラウンド・ゼロの現場が言語化される瞬間を再び取り戻す努力が必要である。

#### 4 帝国のアンダーグラウンドと転倒の（不）可能性

朝鮮窒素興南工場の労働者であった李北鳴は、韓雪野を通じてカップと文壇に進出し、島木健作の推薦で日本のポスト・プロ文学の場に紹介された。興南－京城－東京へとつながるネットワークにおいて「代理＝代表者」として浮上した李北鳴には常に「労働者出身の作家」という尾ヒレがついてまわり、彼は植民地／帝国体制内で通用していた文学的規範と制度的条件の制約の中で、工場＝要塞における経験とその内外の生を再現していた。彼は「いつでも工場に行く準備ができており、漁村、農村に従軍する用意がある<sup>43)</sup>」状態を維持するために生活者としての生を拒否するほど、「代理＝代表者」としての自意識を強く持っていたとみられる。しかし、彼が工場＝要塞の生を文学の場の中で伝達しようとするほど、それは分離された領域に立ち入らざるを得なかった。

興南－京城－東京は、文学という装置がグラウンド・ゼロを分離された領域から捕獲する経路のひとつといえるだろう。この経路は、グラウンド・ゼロによって支えられる



ことでのみ権威を維持することができる法、言語、メディアの領域を通過する過程で形成されたもので、この経路をたどって行く者たちは、治安維持法と新聞紙法と各種の検閲装置の鉄条網にぶつかっていき、意味と象徴が作り出す文学の場の効果の中で固有の名前が付与され、植民地／帝国体制の言語の境界を越える（翻訳する）過程で傷を負うことによるのみ疎通する。李北鳴が「生活」の代わりに選択したこの経路もまた険しい道のりであったが、その道のりには、グラウンド・ゼロの「事実」を政治的な検閲の向こうに「生きたまま」送り出すために耐え忍ぶべき苦勞よりは、その「事実」を言語によって奪取し、再び文学的規範の内部に配置する審美的－政治的な経済の中で「生き生き」とさせるために経験すべき苦勞の方が多かったと思われる。つまり、グラウンド・ゼロが不安定に統合している敵対をどのように言語と意味の世界において活性化することができるのかをめぐる困難であったといえるだろう。

植民地／帝国体制のさまざまな装置の下で形成された李北鳴の経路とは異なり、朱仁奎が結び付けられていた経路は興南－ウラジオストク－モスクワにつながっていた<sup>44)</sup>。この経路は、植民地／帝国体制の外部に出て行くことのできる裏の出口であり、当然、体制のアンダーグラウンドへと通じていた。もちろんこのルートは、朱仁奎たちが利用する前に、かつての社会主義革命運動と解放運動の先駆者たちが開拓しておいたものであった。このルートは帝国のアンダーグラウンドにおいて、アンダーグラウンドの多様な資源を利用してつくられた経路の一つであった。グラウンド・ゼロが、統治と統治不可能性が緊張の中で対峙する現場であるとするならば、アンダーグラウンドは統治不可能なものが予期せぬ関係をつくり出す領域であるといえる。

朱仁奎たちの背後に秘密警察、特高、情報員の訊問と拷問と殺害の脅威がつきまわっていたように、アンダーグラウンドは、主権的暴力が素顔をあらわにする場所である。地下活動家と秘密警察がともに動くアンダーグラウンドではしばしば「道なき道」、「屋根なき家」がつくられる。そこでは、「名もなき名」が関係を結んで分散していく。「名のなき名」は仮名でもありうるが、自己同一性が確認できない、または確認される必要のない無数の名前でもある。ここでは、風評が情報を伝達する。発信者と受信者を確定することができず、伝達過程で情報の内容と性質が変化する可能性もある不完全な疎通が行われる。しかし、その不完全さは「当初の情報の損傷」とは次元が異なるもので、伝達者の感情と希望と意志などが付加された「情報を超えた情報」という意味における不完全さである。この散漫な疎通とともに、注釈のない文章、著者のない文章が横行する。

このようにアンダーグラウンドにおいては、法を知ることができない、または知りな



がらも違反し、特権的な象徴と意味が変形するか、無力化し、独占的なメディアを超える雑音が広がっていく。植民地／帝国体制の法、言語、メディアはこのアンダーグラウンドを掌握して統治しようとするが、それは必然的に内部で敵対的な緊張を高める結果をもたらす。プロフィンテルンと汎太平洋労働組合秘書部の指導下にあったが、朱仁奎たちは、このアンダーグラウンドを掌握したり統治する能力もなく、ただ自分たちが活用する資源をアンダーグラウンドにおいて探し出すだけであった。地下組織活動が摘発され検挙されたために、そうして、彼らの活動が植民地／帝国体制の法、言語、メディアによって剥製化されたがために、彼らがこの資源を活用して何をつくり出すことができたのかは明らかではない。しかし彼らの周辺に、東京帝国大学を卒業した理学士の都相禄サンロクなどが相対性理論についての講演をする際、「私たちは物理学を学びに来たわけではない」と声を上げ、「自分たちの血と肉となる」知識を求めた労働者たち<sup>45)</sup>、封建的家父長を避けて家出した女性に避難所を提供した女性たち<sup>46)</sup>がいたであろうと推測することはできる。

この中断された試みが再び実現される可能性は、日本の敗戦後に開かれた。特に興南の工場＝要塞の「敗戦」は印象的であった。ここでは、「ビリが一番になり、一番がビリとなる」<sup>47)</sup>という極端な転倒状況が繰り返された。1945年8月26日未明、ソ連軍立ち会いの下、興南工場労働組合長の林忠錫イムチュンソクの名で工場が接収され、すべての日本人が工場から追放された後、日本人と朝鮮人の地位が完全に逆転したのである。9月から、日本人は朝鮮人の社宅または合宿所に、朝鮮人は日本人の社宅に住居を移すことになり、10月から、日本人技術者と人夫が工場に入り始めた時、最も底辺の単純労働を担った日本人人夫の中には過去に課長・係長などの管理職にいた人々も混ざっていた<sup>48)</sup>。端的に言うと「日本人さまが朝鮮人やろうに、朝鮮人やろうが日本人さまになった」<sup>49)</sup>のである。しかしこれらの転倒は、単に民族的次元だけでなく、階級的次元においても行われた。革命的労働組合組織運動をはじめ、赤色労働組合運動を展開していた社会主義者と労働運動家たちを中心に咸南〔咸鏡南道〕ハムナム ハムギョナムド共産主義協議会が結成（8月23日）され、興南工場には化学労働組合が結成されて、労働者による工場管理が実現したのである。興南だけでなく、北朝鮮のあちこちの工場で労働者が「工場管理委員会」を組織し、自主的な工場運営をしようとする一方で、8時間労働制、失業保険制、少年労働の禁止などを求める集会も行われた<sup>50)</sup>。もちろん、ソ連軍の占領という特殊な条件は作用したが、日本が敗戦するやいなや、監禁されていた人々が釈放され、追放された者たちが工場を接収し、沈黙していた人々が語り始める状況は、植民地／帝国のグラウンド・ゼロが崩壊し、その

下でアンダーグラウンドが口を開きでもしたような様相を呈した。

しかし、当面の経済復興と国家建設という目的を前面に押し出し、社会主義者たちは生産力の拡充のため労働者たちの自主的な工場管理を否定し、徐々に上からの管理と労働規律の強化路線を採用することになる。特に、<sup>キムイルソン</sup>金日成中心の東北抗日聯軍勢力は労働者たち厳しい労働規律を求めたが、解放直後、<sup>ピョンヤン</sup>平壤鉄道工場の労働者たちの食糧要求闘争に対して「建国事業の先頭に立つべき労働者たちがそれをやり切れず騒動を起こすのは、実に恥ずべきこと」とし、該当労働者を「失業者たち」、「努力時間の浪費者たち」、「害毒の傾向」と批判した<sup>51)</sup>。労働力が国家建設事業に従属しなければならないという立場が権力を獲得していくなか、産業施設の「国有化」によってただちに人民大衆の利害と国民の利害が一致したと結論づけ、より強力な労働規律の強化を求めて生産力拡充に拍車をかけたのである。

社会主義国家建設という不可侵の大義の下、政治的—倫理的位階が激しい政治闘争を伴い、再構築されるによって、日本の敗戦直後開かれたかに見えたアンダーグラウンドは、新たな国家中心の法、言語、メディアが捕獲し翻訳した世界によって再び封鎖される。このように構築された世界では、個人の利害と国民の利害を一体化させた者だけが「主体」となり得た。日本敗戦後の転倒が「解放」と「革命」に転化するためには、同一構造内における位階の転倒ではなく、アンダーグラウンドの統治不可能な潜在性から新たな共通性の基盤を発見する過程が伴われなければならなかった。国家や理念がつくり出す「国民」または「人民大衆」に収斂することのできない、多くの関係から普遍的なものと社会的なものを構成する過程が省略される時、植民地主義は姿を変えて存続することができるからである。

解放直後、咸興検察所・所長を務めた朱仁奎は、1946年北朝鮮文学芸術総同盟傘下の映画同盟委員長を、1947年には、北朝鮮国立映画撮影所・所長などを歴任したが、朝鮮戦争後、北朝鮮内の権力闘争の過程で宗派事件に巻き込まれ取り調べを受けている途中、自殺(1956.9)によってその生涯を終えた。一方、解放直後に短編小説「労働一家」(1947)を発表し、興南工場を生産の時間でいっぱい埋めた李北鳴は、この頃「窒素肥料工場」の初の朝鮮語完結版(1957)を記念碑のように書いていた。この二人の交錯した運命は、民族的・階級的な転倒を「革命」と同一視する場合、労働がただちに生であり解放である「明朗な」秩序の下、—それ自体の起源でもある—アンダーグラウンド自体を削除しようとする不可能な試みが行われることもあったことを警告しているかのようである。

## 謝辞

\*本論文は2013年10月26日、同志社大学人文科学研究所が主催した国際学術シンポジウム「植民地主義のなかの帝国」において発表した文章を修正したものである。修正するなかで、文章を読んでくださり、議論していただいた富山一郎先生と「火曜会」の皆さまに感謝を申し上げる。

## 注

- 1) 「地下室を築造根拠、覆面・暗号で行動、六十余名の取り調べ進行、興南赤色労組事件」、『東亜日報』, 1932.6.19.
- 2) 「革命的労働組合組織運動事件」、『思想彙報』, 1934.12.
- 3) 彼は1932年9月、警察の拷問によって入院している途中に脱出したが、再び逮捕され、1933年5月11日に死亡した。
- 4) または朱仁奎の弟の朱善奎チュソンギョの可能性もある。朱兄弟はともに革命的労働組合組織運動に参加し、特に朱善奎は、「興南左翼」の一員として重要な役割を担った。朱仁奎は3年、朱善奎は5年の刑を宣告された。
- 5) 彼は組織運動に参加しながらも、映画界から完全に身を隠すことはなかった。彼は自身が創作したシナリオに基づいて製作された「盗人野郎」(1929)にも出演したりもして、太平洋労組事件で検挙される直前まで黄雲ファンウンとともにつくった「キルアンドゥン映画社」を通じて、「気の毒な人々」という映画を製作していた。また1938年に入獄した後は「福地万里」(1941)、「望楼の決死隊」(1943)などに出演したことがある。
- 6) 後日、李北鳴は「窒素肥料工場」が掲載禁止となりただちに検察に連行され、それによって、工場からも追い出されたと証言している。(李北鳴〈1957〉「工場は私の作家作業の大学であった」, ナム・ウォンジン編〈2010〉『李北鳴小説選集』現代文学, 452頁。)
- 7) 李北鳴の朝鮮窒素興南工場の経験と彼の小説との関連性に迫った研究として、キム・ジョンウク(2010)「野口コンチェルンとの関係を通してみた李北鳴の小説世界」、『国語国文学』, No.155を参照。
- 8) 李北鳴, 前掲書, 439頁。
- 9) 植民地朝鮮の代表的な労働小説とみなされた「窒素肥料工場」は、1936年には中国の作家・茅盾が創刊した翻訳文学雑誌『譯文』にもまた「初陣」というタイトルで掲載されながら、『山霊－朝鮮台湾短編集』(上海:文化生活会社, 1936年)にも再収録されている。(金在湧〈1990〉「日帝下労働階級の小説的形象化」、『民族文学運動の歴史と理論』, ハンギル社, 135頁; 金良守〈2003〉「胡風と『朝鮮台湾短編集』」、『中国学報』, No.47; キム・ジョンウク, 前掲論文, 275～276頁を参照。)
- 10) 本論文における「アンダーグラウンド」は、ただ単に「地下」を意味したり、「上/下」あるいは「表層/深層」の対立に基づく価値論的表象として還元されたりしない。ここで「アンダー」とは、空間的のみならず、時間的な意味をも含んでいる。例えば、「工事中」を「under construction」と表現するように、「アンダーグラウンド」は「グラウンド」にな

る過程、すなわち言語、法、メディアによって生が捕獲され、制度が形づけられていく動態性として用いている。強固な「グラウンド」が先に存在し、その「下」で地下活動が行われているのではなく、むしろ「グラウンド」こそが、無定型で流動的な生の流れを遮断し、捕獲し、変形させることによってつくられた結果でできたものであるといえる。「地下活動」が有する「非合法性」がむしろ「法」に先行することができるという事実を想起させるため、本論文においては「アンダーグラウンド」という表現に特別な意味を与えている。

- 11) 興南は野口の朝鮮窒素工場が建設されることによってつくられた都市である。1930年9月、雲田面の一部に朝鮮窒素工場、供給所、社宅などが立ち入ると同時に、その地域を最初から行政的に完全に分離し、興南面として独立させたのである。その後、急速に工場や付属施設（学校、警察署、病院など）が次々と建設され、〔興南面は〕1年たった後に邑に昇格した。
- 12) 「資本－国家コンビナート」的性格については、車承棋（2013）「資本、技術、生命－興南－水俣あるいは工業都市の解放前後－」、『사이間 SAI』, No.14 を参照。
- 13) Manuel Castells（1979）, *The Urban Question*, The MIT Press を参照。
- 14) 「窒素は火薬と爆薬の原料として軍事上、絶対の必需品である以上に、食糧問題の基本要素として一国の生存に重大関係を有しているのである」（文東彪「一望無際興南平野 世界的大工業都市」、『朝鮮日報』, 1939.9.24.）

朝鮮窒素は肥料生産からスタートし、徐々に製造品目を多様化していった。特に、水力発電所が増加して確保することのできる電力が増えると同時に、肥料よりも火薬、鉱業、油脂などに拡大していった。日本窒素全体の輸入において肥料が占める割合は、1936年頃には60%に、1939年には40%に減少した。（小林英夫〈1973〉「1930年代日本窒素肥料株式会社の朝鮮の進出について」、山田秀雄編『植民地経済史の諸問題』、アジア経済研究所、163頁。）それにもかかわらず、興南工場の硫酸アンモニウムの製造能力は、1943年現在、日本帝国全体の硫酸アンモニウムの製造能力（189万トン）の26%と、すべての硫酸アンモニウム工場の中で最大であった。（木村光彦・安倍桂司著、チャ・ムンソク・パク・チョンジン訳〈2009〉『戦争がつくった国、北朝鮮の軍事工業化』、ミジブックス、118頁。）

- 15) 野口資本と総督府権力が結託し暴力的に工場敷地を確保すると同時に、その地域の土着民はほとんど強制的に移住を強いられた。（「巡査を送り捺印を強要」、『東亜日報』, 1927.6.14.: 「不応であれば検束、買渡承諾に受印、地主を区長の家召集し警察が干渉して印鑑を捺印し、会社車で署長出勤」、「警察署長万端であれば司法機関何用、法令はどのように利用しようが咸興署長の命令であればそれまで」、『東亜日報』, 1927.8.27.）
- 16) 特に恐慌以降、失業者の人口が多い時、競争率が深刻であった。（「人夫80の採用に2000余名が殺到」、『朝鮮日報』, 1931.6.20.: 興南支局一記者「地方時論：興南の失業者問題」、『朝鮮日報』, 1931.9.9.などを参照。）その上、工場側から「本工場にいる職工も定員を超過しそうな状況なので、遠方から本工場を対象に求職しに来ることのないよう注意せよ」という掲示物を貼り付けておくほどであった。（『各地の労働者よ、ここに来ることなかれ』

興南窒素会社の揭示」、『朝鮮日報』, 1932.1.19.を参照。)しかし日中戦争勃発後, 日本人労働者が戦線に徴用されていきながら, 人材不足の問題に直面し〔たことにより〕, 他の地域の朝鮮人遊休労働力, 学生, さらには囚人と捕虜まで集団で動員していくようになる。

- 17) ファクトリーという単語は, アフリカ沿岸の港に進出するための足掛かりとして設けられたポルトガルのフェイトリア (feitoria), すなわち, 原住民との交易所の名前に由来する。「工場は要塞と不動産を共有し, 植民地戦争において重要な役割を担う帝国企画<sup>プロジェクト</sup>の代理人であった。」(Susan Buck-Morss (2009), *Hegel, Haiti, and Universal History*, University of Pittsburgh Press.)
- 18) 労働者たちでさえも, 出勤証を提示しなければ, その工場を出入りすることができなかった。また, ほとんど, 軍人や刑務所の看守出身から成る警備員たちは, それぞれの警備室を1時間ごとに巡回しながら, 交代者に特異事項を報告するという典型的な軍隊式の警戒方式をとった。(岡本達明・松崎次夫編〈1990〉『聞書水俣民衆史』第5巻, 草風館, 135～139頁; 全美男「窒素肥料工場探訪記」, 『中央日報』, 1932.2.7.)
- 19) 日本窒素の幹部技術者であった植木善三郎の回顧によれば, 興南工場は試験を省略して, すぐに現場で新技術を実験する方式で技術適用をしたのが特徴的である。(植木善三郎(1979)『興南工場の思い出—日本窒素史への証言6集』, 「日本窒素史への証言」編集委員会を参照。)
- 20) 「グラウンド・ゼロ」は「アンダーグラウンド」と同じく, ささまざまな誤解を招き得る表現である。それでもかかわらず, 植民地／帝国の言語, 法, メディアが構築されるためには, 常に生を捕獲する暴力の前線がつけられるしかなかったという事実を指し示すために, この用語を用いる。植民地主義が制度化される至る所に「グラウンド・ゼロ」は存在するといえるだろう。
- 21) 岡本達明・松崎次夫編, 前掲書, 148頁。
- 22) したがって朝鮮人は, 技術的に重要な仕事からは除外された。その上, 例えば, 朝鮮人の日雇い労働者の場合, 給料を受け取ると, 2～3日出勤しないことが多かったという。(同上書, 85頁を参照。)
- 23) 同上書, 94頁。
- 24) 「分離器の爆発で死傷者7名」, 『朝鮮日報』, 1931.3.31; 「興南窒素工場惨死者が続出」, 『朝鮮日報』, 1931.4.26; 「興南に大火」, 『朝鮮日報』, 1932.2.3; 「『タンク』の爆発で職工2名即死」, 『朝鮮日報』, 1932.4.26 など。
- 25) 「興南一帯 小児病蔓延」, 『朝鮮日報』, 1934.1.21; 「正体の分からない流行病 興南に大猖獗」, 『朝鮮日報』, 1934.11.3; 「興南地方に小児死亡激増」, 『朝鮮日報』, 1936.2.12; 「各漁場到大打撃, 興南工場の排水有毒で」, 『朝鮮日報』, 1939.6.7 など。植民地朝鮮の興南と戦後日本の水俣を結ぶこの資本—国家コンビナートの副産物としての疾病については, 別途の考察が必要である。
- 26) クァク・コノン (1995) 「1930年代初め朝鮮窒素肥料工場の労働者組織運動」, 『歴史研究』, No.4; チェ・ギュジン (1997) 「『コミニストグループ』と太平洋労働組合系列の労働運



動方針」, 『歴史研究』, No.5 など。

- 27) Louis Hjelmslev 著, キム・ヘリヨン・キム・ヨンスク訳 (2000) 『ランガージュ理論序説』, 東文選。
- 28) 磯谷季次著, キム・ゲイル訳 (1998) 『わが青春の朝鮮』, 四季節, 69 頁。
- 29) 「革命的労働組合組織運動事件」, 『思想彙報』, 1934.12, 45 頁。
- 30) そのような点において, 朱仁奎たちが関わる革命的労働組合組織運動に対する検挙の発端がメーデーを控えて行われた警察の予備検束の過程で発見された一枚の『労働者新聞』から始まったという事実は意味深長である。目に見えない数多くの流れが文字で表明される場所は, 植民地／帝国の法, 言語, メディアがその多くの流れを「読めるもの」にする場所でもある。(「事件発覚の端緒は『労働者新聞』一枚」, 『朝鮮日報』, 1933.12.23.)
- 31) 「取調室は身に寸鉄をおびぬ者と権力で武装した者との間の凄惨な戦場」であった。磯谷季次, 前掲書, 107 頁。
- 32) チェ・ギュジン, 前掲論文を参照。
- 33) キム・ユンジョン (1998) 「1930 年代初頭汎太平洋労働組合系列の革命的労働組合運動」, 『歴史研究』, No.6, 128 頁。
- 34) このように判断できる根拠は, 1930 年を前後して新しい「大衆」が登場しているからである。社会主義運動勢力はもちろん, 元山ゼネスト (1929) と平壤ゴム工場ストライキ (1930) に鼓舞されて, 歴史発展の主体としての労働者階級の「必然的な」成長を再認識したかもしれないが, プロフィンテルンと汎太平洋労働組合が草の根からの大衆的な組織化を基本路線として採択することができたのは, 「大衆」の新たな政治的潜在性に対する発見があったからであることに注目する必要がある。この潜在性が結果的に共産党の大衆的基盤であり, 革命の原動力として活用されなければならないという目的に従属していたとしても, 1930 年前後の時期のあらゆる「大衆路線」と「大衆化」戦略が何の論争もなく画一化されたわけではない。この時期の政治と文化において, 新たに登場する潜在性に対する事由を再考察する必要がある。
- 35) ハン・ヒョ「今年度創作界概観 (5)」, 『東亜日報』, 1935. 12.19. ここで論評されている作品は「窒素肥料工場」の日本語翻訳版「初陣」である。
- 36) 李北鳴自身も当時の文壇にある程度疎外感を感じていたものと思われる。当時, 朝鮮文壇で認められていなかった張赫宙<sup>チャンヒョクチュ</sup>は, 才能のある同僚に対する妬みと嫉妬が文壇内に蔓延していると批判し, 李北鳴もまた同じような不満を示していたと述べている。(張赫宙「文壇のベスト菌」, 『三千里』, 1935.10, 253 頁。)
- 37) 例えば, 朝鮮窒素興南工場の過酷な労働条件と危険な現場をみつかった「出勤停止」(『文学建設』, 1932.12) という小説は, 過去に実際に起こった『忘れようか! 「昭和 6 年 11 月 X 日午後 3 時 15 分…」 H 邑 3 万市民を通りに飛び出させ, 肝を冷やしたその爆音! …』を記録している。
- 38) 島木健作「「初陣」について」, 『文学評論』, 臨時増刊 新人推薦号, 1935 年 5 月, 168 頁。
- 39) 同上文, 163 頁。



- 40) この時期の「植民地文学」を一つの文芸ジャンルとして命名した中根隆行は「日本文学界と植民地をつなぐ出版メディアの拡張と朝鮮・台湾・満洲を主とした植民地の原住民による日本語作品の介入的な参加、そして、文芸メディアおよび文学的制度をめぐる市場的活性化という要素が複層的に絡み合って確立された文芸ジャンル」と規定している。(中根隆行〈2001〉「1930年代における日本文学界の揺らぎと植民地文学のジャンルの生成」、『日本文化研究』, 4号, 315頁。)
- 41) 高栄蘭<sup>コヨラン</sup>は、張赫宙の『改造』への登壇を帝國的なメディア市場の拡大と新たな文化商品の開発の側面から説明している。(高栄蘭〈2009〉「帝国日本の出版市場再編とメディアイベント—「張赫宙」を通してみた1930年前後の改造社の戦略—」, 『サイ間 SAI』, 6号を参照。)
- 42) この遅滞した場合は、「誤って呼ばれた」場でもある。「内地」文壇に遅れて「新人」として推薦された李北鳴の名前は奇しくも、李兆鳴と誤記されている。『文学評論』の次号で訂正記事を書いたことからみて、植字工が単にミスをしただけの可能性もあるが、このミスは見方によっては李北鳴という名前が象徴する場所性が誤って呼称されていることを暗示しているようでもある。
- 43) 李北鳴「情熱の再生」, 『風林』, 1936年5月, 41頁。李北鳴は文学にとって生活が邪魔になると考え、それほど多くない財産の所有権を母と弟宛も移転し、自ら生活から退けようとしたが、彼がこれほどまでに生活と文学を敵対的なものと理解していたという点は興味深い。彼にとって、作家として実践するということは、ある「決断」の所産であったものと推測される。
- 44) 朱仁奎などが関わっていた組織運動を主導した金元黙<sup>パクセヨン</sup>、朴世榮をはじめ、数年間、興南で続けられた赤色労組組織運動には、モスクワにある東方労力者共産大学出身の社会主義者たちが関わっていた。
- 45) 「大盛況を呈した学術講演を聞いて」, 『朝鮮日報』, 1931.8.3.
- 46) 磯谷季次, 前掲書, 97頁。
- 47) 『マタイによる福音書』, 20章16節。
- 48) 鎌田正二(1970)『北鮮の日本人苦難記』, 時事通信社; 孫禎睦<sup>ソンジョンモク</sup>(1990)「日帝下化学工業都市興南に関する研究(下)」, 『韓国学報』, Vol.16/No.3, 214~215頁を参照。
- 49) 岡本達明・松崎次夫編, 前掲書, 251頁。
- 50) イェ・テヨル(2008)「解放以後北韓の労働組合の性格論争と労働政策の特質」, 『歴史と現実』No.70, 212頁を参照。
- 51) 朝共北朝鮮分局中央第三次拡大執行委員会(1945)「北部朝鮮党の工作の錯誤と欠点に対する決定書」, 『北韓関係史料集』1巻, 1994年, 12頁; イェ・テヨル, 前掲論文, 221頁より再引用。

## 参考文献

### 基本資料

[新聞・雑誌]

『東亜日報』『朝鮮日報』『文学評論』『中央日報』『三千里』『文学建設』『風林』『思想彙報』

[日本語]

岡本達明・松崎次夫編 (1990) 『聞書水俣民衆史』 第5巻, 草風館

「日本窒素史への証言」編集委員会 (1977 ~ 1992) 『日本窒素史への証言』『日本窒素史への証言』編集委員会

[韓国語]

남원진編 (2010) 『이북명소설선집』, 현대문학

(ナム・ウォンジョン編 <2010> 『李北鳴小説選集』, 現代文学 <韓国>)

研究論文・単行本

[日本語]

小林英夫 (1973) 「1930年代日本窒素肥料株式会社の朝鮮の進出について」, 山田秀雄編 『植民地経済史の諸問題』, アジア経済研究所

[韓国語]

磯谷季次, 김계일訳 (1988) 『우리 청춘의 조선』, 사계절

(磯谷季次, キム・ゲイル訳 <1988> 『わが青春の朝鮮』, 四季節 <韓国> (原著は, 磯谷季次 <1984> 『わが青春の朝鮮』, 影書房))

木村光彦・安倍桂司, 차문석・박정진訳 『전쟁이 만든 나라, 북한의 군사공업화』, 미지북스

(木村光彦・安倍桂司, チャ・ムンソク・パク・チョンジョン訳 <2009> 『戦争がつくった国, 北朝鮮の軍事工業化』, ミジブックス <韓国>。原著は, 木村光彦・安倍桂司 <2003> 『北朝鮮の軍事工業化—帝国の戦争から金日成の戦争へ』, 知泉書館)

나카네 다카유키 (中根隆行) (2001) 「1930년대에 있어서 일본문학계의 동요와 식민지문학의 장르적 생성」, 『일본문화연구』, No.4, 동아시아일본학회

(中根隆行 <2001> 「1930年代にみる日本文学界の揺らぎと植民地文学のジャンルの生成」, 『日本文化研究』, No.4, 東アジア日本学会 <韓国>)

高榮蘭 (2009) 「제국 일본의 출판시장 재편과 미디어 이벤트 -" 장혁주 (張赫宙)" 를 통해 본 1930년 전후의 개조사 (改造社) 의 전략 -」, 『사이間 SAI』, No.6, 국제한국문학문화학회

(高榮蘭 <2009> 「帝国日本の出版市場再編とメディアイベント—「張赫宙」を通してみた1930年前後の改造社の戦略—」, 『사이間 SAI』, No.6, 國際韓國文学文化学会。<韓国>)

곽건홍 (1995) 「1930년대 초반 조선질소비료공장 노동자조직운동」, 『역사연구』, No.4, 역사학연구소

(クァク・コノン <1995> 「1930年代初め朝鮮窒素肥料工場の労働者組織運動」, 『歴史研究』, No.4, 歴史学研究所 <韓国>)

金良守 (2003) 「胡風과 『朝鮮臺灣短篇集』」, 『中國學報』 No.47, 한국중국학회

- (金良守 〈2003〉「胡風と『朝鮮台湾短編集』, 『中国学報』, No.47. 韓国中国学会 〈韓国〉)
- 김윤정 (1998) 「1930년대 초 범태평양노동조합 계열의 혁명적 노동조합운동」, 『역사연구』, No.6, 역사학연구소
- (キム・ユンジョン 〈1998〉「1930年代初頭汎太平洋労働組合系列の革命的労働組合運動」, 『歴史研究』, No.6. 歴史学研究所 〈韓国〉)
- 김재용 (1990) 『민족문학운동의 역사와 이론』, 한길사
- (金在湧 〈1990〉『民族文学運動の歴史と理論』, ハンギル社 〈韓国〉)
- 김종욱 (2010) 「노구치콘체른과의 관계를 통해 본 이복명의 소설세계」, 『국어국문학』, No.155, 국어국문학회
- (キム・ジョン옥 〈2010〉「野口コンチェルンとの関係を通してみた李北鳴の小説世界」, 『国語国文学』, No.155, 国語国文学会。〈韓国〉)
- 손경목 (1990) 「日帝下 化學工業都市 興南에 관한 研究 (下)」, 『韓國學報』, Vol.16/No.3, 一志社 (孫禎陸 〈1990〉「日帝下化学工業都市興南に関する研究 (下)」, 『韓國学報』, Vol.16/No.3, 一志社 〈韓国〉)
- 예대열 (2008) 「해방이후 북한의 노동조합 성격 논쟁과 노동정책 특질」, 『역사와 현실』, No.70, 한국역사연구회
- (イェ・テヨル 〈2008〉「解放以後北韓の労働組合の性格論争と労働政策の特質」, 『歴史と現実』, No.70, 韓国歴史研究会 〈韓国〉)
- 차승기 (2013) 「자본, 기술, 생명 - 흥남 - 미나마타 [水俣] 또는 기업도시의 해방전후 -」, 『사이간 SAI』, No.14, 국제한국문학문화학회
- (車承棋 〈2013〉「資本, 技術, 生命—興南 - 水俣あるいは工業都市の解放前後—」, 『사이간 SAI』, No.14, 國際韓國文学文化学会 〈韓国〉)
- 최규진 (1997) 「'공무니스트 그룹' 과 태평양노동조합 계열의 노동운동 방침」, 『역사연구』, No.5, 역사학연구소
- (チェ・ギュ진 〈1997〉「『コミニストグループ』と太平洋労働組合系列の労働運動方針」, 『歴史研究』, No.5, 歴史研究所 〈韓国〉)

## [英語]

Susan Buck-Morss (2009), *Hegel, Haiti, and Universal History*, University of Pittsburgh Press.

Manuel Castells (1979), *The Urban Question*, The MIT Press.

Louis Hjelmslev, 김혜련·김용숙 訳 (2000) 『랑가주 이론 서설』, 동문선.

(Louis Hjelmslev, 키ム·헤리온·키ム·욘스크 訳 〈2000〉『ランガージュ理論序説』, 東文選 〈韓国〉)